

中華民国期山東省青島における公立学校教員
——「連続服務教員」に着目して——

山本 一生

本稿では山東省青島^{チンタオ}を研究対象とし、日本占領時期から戦後蒋介石政権時期へと移行する時期に公立学校教員の地位がどう連続したのか、近年の研究成果を踏まえて検討する。青島を対象とする理由は、国家権力が頻繁に入れ替わった都市の一つだからである。そのため政権毎の断絶面ではなく、むしろ連続面を浮き彫りにできる。公立学校教員を扱う理由は、近代国民国家において、国家の教育事業と基層社会の子弟との中間に位置づけられたのが近代学校であり、その具体的な担い手が学校教員だからである。教員は国家権力によって学校を通して民衆掌握が期待され、かつ地域の知識人として国家による思想統制などの諸政策の影響を直接に被る存在でもあった。では国家権力の入れ替わりが学校教員にとってどのような意味を持ったのか。これまでの研究では前時代との断絶が強調されてきた。しかし近年、連続性に着目した研究がなされてきている。

第一章では青島における学校制度の変遷について1900年代から40年代の青島における小学校の増加とその背景について検討する。第二章では戦後国民政府による「教育復員」の実状を通して教員としての地位の一貫性を検討する。その目的を達成するために、初等教員の履歴を用いる。第三章では年金の申請記録を検討することで、戦後国民政府が「連続服務教員」をどう扱ったのか分析する。以上の検討を経て、青島における学校教員の地位の一貫性を検討する。

検討の結果を以下の二点にまとめる。第一に、市区の教員人事は政治状況の変化に影響されやすかったが、郷区は政治状況の変化にさほど影響を受けなかったことが明らかとなった。第二に、「連続服務教員」の日本統治時代の勤務記録を給付対象として認めるかどうかという論点をめぐって、教員個人と当局側の対立が浮き彫りになった。

以上の検討から、青島の教員の地位は時の政権によって翻弄されつつも、彼らは国家と社会の狭間で教員としての地位の一貫性を維持しようとしていたと言えよう。